

Title	二〇一三年度ワディ・タワヒーン遺跡(パレスチナ自治区)における考古学的発掘調査
Sub Title	A preliminary report on the 2013 archaeological excavations at Wadi et-Tawaheen, Palestine
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, David Tomotoshi) 菊池, 実(Kikuchi, Minoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	2014
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.83, No.2/3 (2014. 7) ,p.119(245)- 138(264)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20140700-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇一三年度 ワデイ・タワヒーン遺跡 (パレスチナ自治区)における考古学的発掘調査

杉本 智俊
菊池 実

1. はじめに

慶應義塾大学文学部杉本研究室は、二〇一三年八月一日(水)～九月四日(水)まで、パレスチナ自治区ベイトイン村ワデイ・タワヒーン谷にあるネクロポリス(墓域)において考古学的発掘調査を行った⁽¹⁾。この調査はパレスチナ観光・考古省 (Ministry of Tourism and Antiquities) との共同調査として行われたもので、別に報告する同村ブルジュ・ベイトイン遺跡の調査と並行して行われた。

ベイトイン村は、パレスチナ自治区ラマッラーの北東八キロほどの所に位置しており、村のあちらこちらに遺跡が散在することで知られている(図1)。村の中央に

あるテル・ベイトインは聖書に登場する町ベテルと一般に同定されており、直線距離で六〇〇メートルほど南東に離れたブルジュ・ベイトイン遺跡はアブラハムが宿営した「ベテルの東」(創世記一二・八)だったと伝承されている。村の南側に広がるワデイ・タワヒーンの谷底は農業に活用されており、その両側斜面には多数の墓が設けられていた⁽²⁾。

これらの墓の分布調査は、昨年度すでに本調査隊が行い、五〇基以上の横穴墓と一〇基以上の竪坑墓が存在することが確認された(杉本・間舎二〇一三参照)。その多くはすでに盗掘されていたが、本年度はそれらの代表的なものを数基発掘することで、この地域の墓の性格を把握し、記録に残すことをめざした。墓の構造を理解す

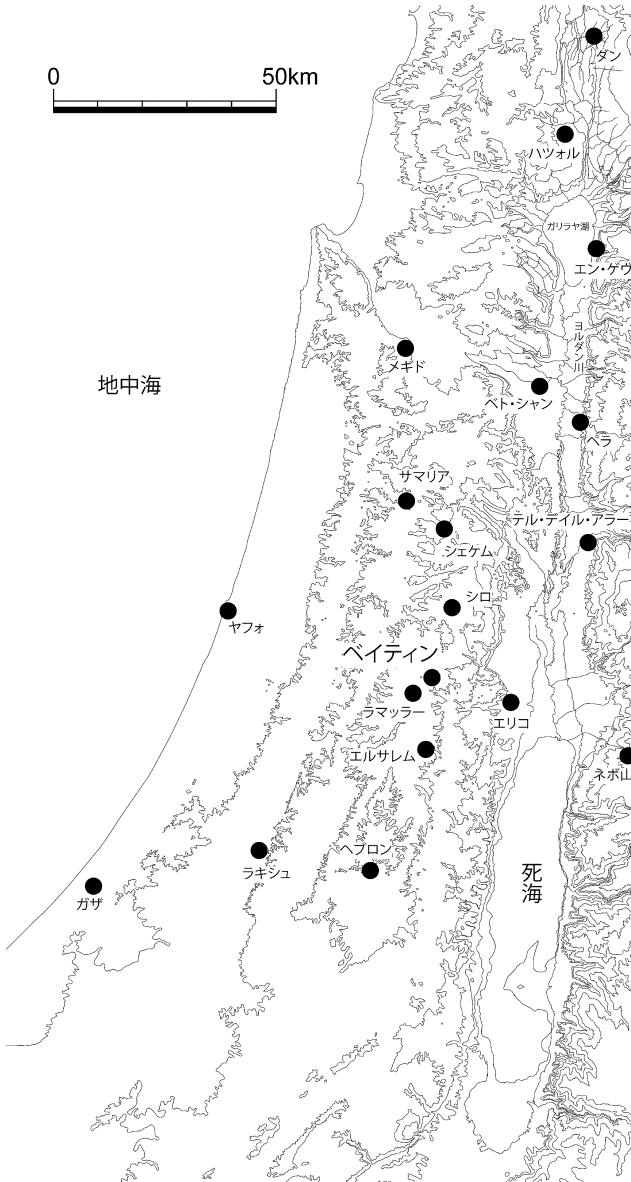


図1 ベイティン村の位置

ることはもちろん、残されている遺物から墓の性格や年代もある程度把握できるものと思われる。

調査区は、横穴墓だけでなく竪坑墓も集中的に確認された西側斜面南側に位置する最上段のテラス（段丘）に設定し、竪坑墓を三基、横穴墓を一基発掘した（図2）。また、昨年度の分布調査は簡易GPSによる全般的なものであったが、本年度は調査区の周囲の表面調査をより厳密に行い、昨年度の分布図を改訂した（図3）。現状ではまだ調査が完了していない墓もあるが、調査のできた範囲において本年度分の予備報告を行う。

今年度の調査隊の編成は、

共同隊長…杉本智俊（慶應義塾大学教授）、H・タハ

（パレスチナ自治区観光・考古省副大臣）

スーパーバイザー…菊池実（東京基督教大学准教授）、

S・タワフシエ（観光・考古省ラマツラー、アルII

ビレ支局長）、B・ナサスラ（同局ナブルス支局

長）

遺構実測…渡部展也（中部大学准教授）、佐野真奈美

（横浜清風高等学校講師）

遺物実測、トレースとりまとめ…渡邊絢、高田優衣

（以上、慶應義塾大学文学研究科）

であり、この他に日本人学生ボランティアとパレスチナ人労働者が参加した。

2. 竪坑墓の調査

竪坑墓は、ワデイ西側の丘の南端、上から二段の段丘の平坦面に集中していることが、昨年度の分布調査から知られていた（図3参照）。昨年度の調査では、墓と断定できない円形の窪地も含め、一七基が確認された。しかし、本年度、墓かもしれないと思われた円形の窪地をいくつか試掘してみたところ墓でないものもあったので、それらを記録することは混乱を招くと判断し、不確実なものは本年度作成の分布図（図4）に載せないこととした。また、昨年度の分布図（図3）も、本年度の調査結果に従って改訂した。調査時には、地表を覆っていた棘のはえた下草をできる限り除去し、岩盤の上に堆積していた厚さ五〇センチメートルの表土をブルドーザーではぎ、墓の確認をしやすくした。

結果的に、確実に竪坑墓とみなせるものは上部テラスで五基、下部テラスで六基あることが判明した。⁽³⁾ 個々の墓に関しても、開口部が円形のもの他に方形のものが見られるなど、形状、規模、深さに大きな違いが認めら



図 2a ワディ・タワヒーン調査区全景（谷の東側から撮影）



図 2b 調査区全景（ブルドーザーで表土をはいだ後）

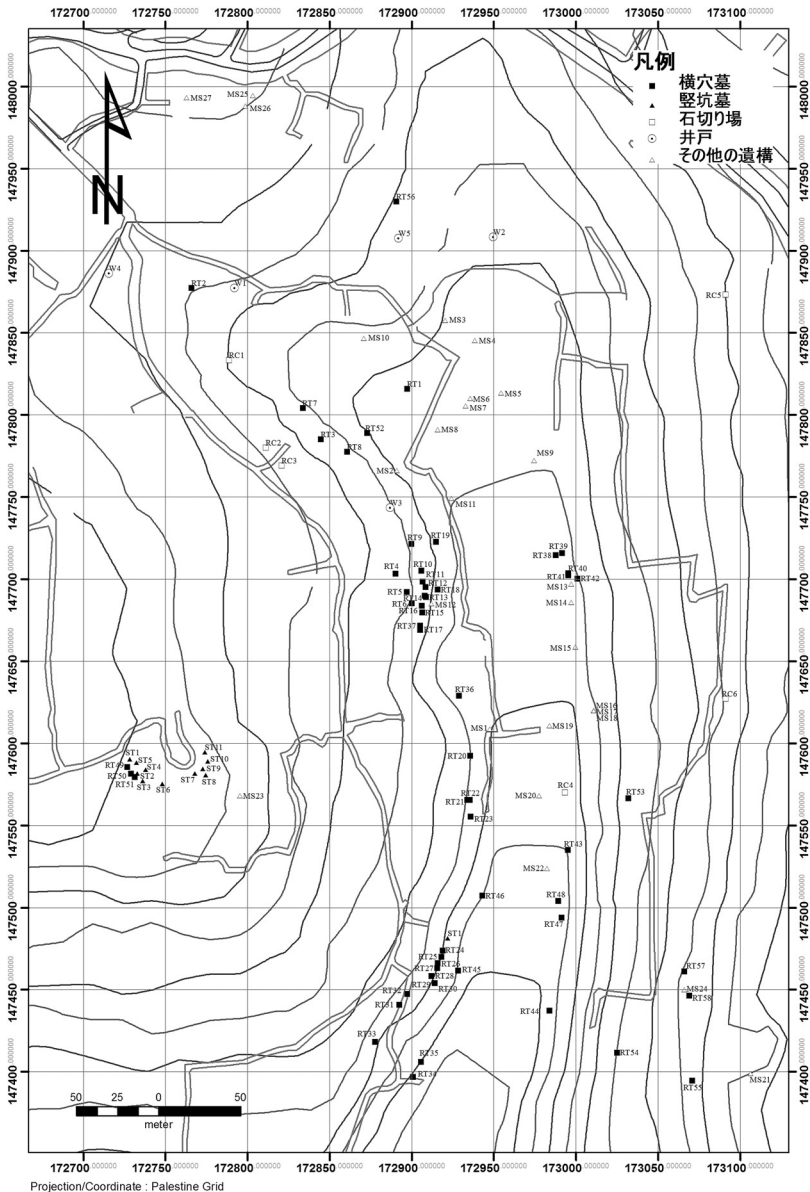


図3 ワディ・タウィーンにおける墓の分布（図作成：渡部展也）

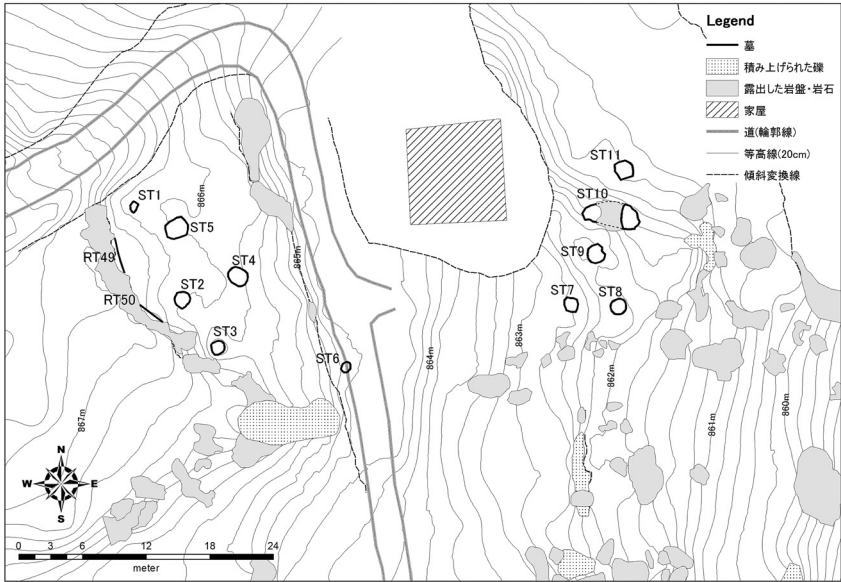


図4 調査区における墓の分布 (図作成: 渡部展也)

れた。また、それらの配置もあまり整然としてはいえなかった。

2-1. 墓1 (ST1、図5)

墓1は、北側の横穴墓の北東約三メートルの位置にあり、円形の開口部を持ち、玄室は北西方向の軸線に沿って設けられていた。竪坑の開口部は、東西八五センチ、南北一・二メートル、竪坑の深さは、岩盤が傾斜していたため、上部(西側)で七六センチ、下部(東側)で五〇センチであった。

玄室の入口は幅約四〇センチの楕円形で、封をする石は存在していなかった。玄室は角の丸くなった矩形をしており、若干横長で、最大幅は約二・六メートルであった。周囲の壁はほぼ垂直に立ち上がっていたが、東側の奥行は自然にカーブして約一・九メートルになっていた。西側の奥の床は損傷し、いくつもの板状になった石灰岩が露出していた。そのさらに奥の床には平石がはめ込まれており、その上部に直径約一〇センチの石がいくつも充填されていた。しかし、これが単なる補修のためなのか、下に穴などが続いていたのかは確認できなかった(西側部分の最大の奥行は、約



図 5a 調査前の墓 1（北東側から撮影）



図 5b 調査後の墓 1（東側から撮影）

二・六メートル)。この石を外すと崩落の恐れがあったためである。

石灰岩を掘りこんだ玄室の床と竪坑には、表土とよく似た赤茶色のテラ・ロッサの土が流入していた。この堆積層（ローカス6）には、凝固した部分と軟土が混在していた。包含遺物の大半は、ローマ時代の土器片だったが、あきらかに鉄器時代のもものと判断できる土器片も数点含まれていた。また、この堆積土の岩盤に近い深さから、明確に屈曲した頸部と大きな平底を持つ壺型土器や四葉型のランプが出土した（図6）。これらは、前期・中期移行期青銅器時代（以下、「移行期青銅器時代」と呼ぶ）に典型的なものである。ただ副葬品や骨は、ほとんど認められなかった。

この墓は盗掘されており、堆積土も後からの流入であると判断せざるを得ないが、玄室の底近くから移行期青銅器時代の土器片がまとまって出土したことは意義深い。竪坑式の構造が移行期青銅器時代によく知られた型式で、鉄器時代やローマ時代にはあまり一般的でないことから考えて、これらの墓は移行期青銅器時代のもものと判断して間違いないであろう。逆に、ローマ時代や鉄器時代の土器片が堆積土に含まれていたことは、この周囲にそれ

らの時代の活動があったことを示唆している。

また、この墓は、竪坑墓としてはかなり小さい部類に属する。移行期青銅器時代の墓は家族墓のほうが一般的であるが、個人墓も決して少なくなく、これはその例だと判断できるかもしれない。

2-1-2. 墓2 (ST6、図7)

墓2は、最上段の段丘が東端部分で一段落ちた地点に位置しており、現在未舗装の道路の脇に位置している。道路が半分ほどその開口部を塞いでいたので、未開封かと期待されたが、やはり盗掘されていた。周囲には、墓かもしれないと思われる窪地がいくつも見られるが、そのいくつかを試掘したところ、そうでないことが判明した。⁽⁴⁾他のものに墓がある可能性は残るが、現状では墓とそうでないものを厳密に区別することはできない。

墓1と比べると、竪坑の規模は大きく、ほぼ円形の開口部は東西一・二五メートル、南北一・〇五メートルあまりであった。竪坑の底は平らになっており、岩盤の石灰岩は板状に方解した状態になっていた。底の東端部分は、半円形に窪められていた。

横穴の開口部は、竪坑の西側に設けられており、地表



図6 竪坑墓から出土した移行期青銅器時代の土器



図7 墓2（南側から撮影）

面から約四五センチ掘り下げたところから始まっていた。入り口の幅は約四〇センチであった。玄室の内部は、奥行き(東西)最大二七メートル、横幅(南北)約四メートルの卵形をしていた。周囲の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっていた。

玄室の床も岩盤が掘りこまれたものであったが、天井部は岩盤がもろく、相当箇所で崩落が認められた。内側には、墓1と同様、表土とよく似たテラ・ロッサの土が流入しており、細かい人骨や土器片が多数含まれていた。採集した人骨は、今後専門家に分析を依頼する予定である。土器片はローマ時代のもものが大半であったが、鉄器時代や移行期青銅器時代の土器片も複数岩盤に近い地点から出土した。

2-3. 墓3 (ST5、図8)

墓3は、北側の横穴墓の東側六メートルほどの地点、墓1の南東四メートルほどに位置していた。この墓は、横穴墓前面の平坦面にブルドーザーを入れ、表土をはいだ際に露出した。

開口部は、東西約一七五メートル、南北約一・九メートルの円形で、今回調査した豎坑墓の中では最大であっ

た。豎坑は、一・六メートルの深さで平らになった底に到達したが、その西側に横穴の開口部があった。開口部の上端は、地表面から一・〇五メートルの深さであった。開口部は、ほぼ正方形(約四〇センチ四方、厚さ約八センチ)の石灰岩の板石によって閉じられていた。板石は開口部に正対して、隙間なく置かれていたので、原位置を保っていたと思われる。しかし、おそらく玄室の内部は盗掘されているので、盗掘者は別の場所からこの玄室に入ったと考えられる。

この開口部は、他の墓と比べてかなり小さく(一八センチ×三五センチ)、人がひとりぎり入り入れる大きさであった。元来の玄室への「入り口」なのかも当初疑わさせられたが、この「入り口」は玄室につながっており、他に人が入れる大きさの開口部はこの豎坑にないので、これが玄室の入り口だったと判断せざるを得ないであろう。

調査の後半になって、この開口部の反対側に六六センチ×五〇センチほどの窪みと約二〇センチ×二二センチの穴がその下から現れた。この穴は、別の豎坑墓の玄室の天井部に通じていたと思われるが、人の出入りは不可能であった。自然浸食によるものか、盗掘用、開口部掘



図 8a 墓 3 の竪坑と開口部（東側から撮影）



図 8b 墓 3 の内部（左側から土砂の流入が確認できる）

削の失敗かは確認できなかった。

西側の入り口に続く玄室自体は、奥行き三・三メートル、最大幅三メートルほどであった。入り口部分がせまくなっており、奥が四角く広がっている。床は、掘り抜かれた石灰石の岩盤であるが、その上には、他の発掘された墓と異なり、あまりテラ・ロッサ土壌の流入が認められなかった。封石が置かれていたためであろう。入口の内部左側（南側）からは、流入した土砂が天井から斜面をなして堆積しており（図8b）、その上部にならぬかの穴があると思われるが、その性格はまだ不明である。土砂自体は、テラ・ロッサではなく、より黒っぽい粘性の低い土であった。土砂の流入の仕方から考えると、この穴は元来の墓の構造の一部ではないと思われるが、この点は来年度再調査をして、確認したい。

玄室の床からは、頭骨一点、椎骨一点など、人骨の一部が検出されたが、全身骨格はわからなかった。また、土器などの遺物も非常に少なかった。

d. 小結

以上の竪坑墓の調査に基づくと、このワディ・タワヒーンの西側斜面の高台に移行期青銅器時代の竪坑墓が集

中して造られていたことはあきらかである。この地域の竪坑墓にはかなり小さいものや方形の竪坑を持つものがある。その形状、規模、深さの変化は大きいと言える。また、未発見の墓もあるであろうが、現状ではあまり整然と並んでいるとは言えない。

今回調査した墓では、岩盤が崩落したり、穴が開いたりしている箇所が多数認められた。墓1の西奥部の崩落や墓2の天井部、墓3の天井の穴、竪坑の入り口反対側の穴である。墓1と墓3のものは、人為的なもの（盗掘など）である可能性も否定できないが、この地域の石灰岩の岩盤が浸食によって崩れてきていることはたしかである。

年代は、竪坑墓の形状からも土器からも確認できる。よく似た竪坑墓は、比較的近くに位置するアイン・サミヤ遺跡などに見ることができ、移行期青銅器時代の墓として一般的なものである。また、遺物に関しても、盗掘を受けているため、ほとんど残っていないが、後に流入した堆積土の最下部から明確に同時期の土器が複数確認されたので、たしかであろう。

今回、移行期青銅器時代の竪坑墓がこのように集中的に確認されたことは、ベイティン（ベテル）の町の居住

史を考える上で大きな意味がある。五〇年以上前にテルの発掘調査を行ったケルゾーは、テルの北西部にある遺構（第ⅢC地区）を、銅石器時代の「高き所」の上に造られた移行期青銅器時代（ただし、彼自身は当時一般的な呼称であった中期青銅器時代Ⅰ期という用語を用いている⁵）の「高き所」であると報告し、この時代には市壁を伴う発達した町があったとした（Kafiso, 1968: 23）。

これに対してディーバーは、この遺構は中期青銅器時代Ⅲ期（彼らの用法ではⅡC期）の「門」の初期段階に過ぎず、移行期青銅器時代の居住を示すものはわずかな土器片とフリント、オルブライトが発掘した住居二基しかないと指摘した。実際、ケルゾーの報告では、移行期青銅器時代から中期青銅器時代Ⅱ期（Ⅱ中期青銅器時代Ⅰ期からⅡB期）の土器は非常に限られている。ディーバーは、ケルゾーの遺構の解釈は移行期青銅器時代を族長時代だとする前提に立っており、古いタイプの「聖書考古学」の手法の典型だと批判してこそ（Dever 1971: 464）。

たしかにケルゾーの遺構解釈には無理があり、報告されている移行期青銅器時代から中期青銅器時代Ⅱ期（Ⅱ中期青銅器時代Ⅰ-ⅡB）期の土器は少ないと言える。

しかし、今回の調査結果は、だからその時代のベイティンの居住は貧弱だったと拙速に結論してはならないことを示している⁶。これらの移行期青銅器時代の竪坑墓から考えると、同時代のベイティンには一定数の居住があったと考えざるを得ないであろう。ただ、その居住形態が都市民であったのか、半遊牧の人々だったのか、といった点については、テル自体の調査を待つ必要があると思われる。

3. 横穴墓の調査

今年度の調査区には、移行期青銅器時代の竪坑墓群の背後の崖に、二基の横穴墓が位置していた。ワディ・タワヒーンは石灰岩の岩盤が露出した段丘状になっているが、これらはその一番上の高さ一・五〜二メートル、幅三〇メートルの垂直な崖に造られていた。二基の横穴墓は約五メートルの間隔をおいて同一の崖に並列して造られており、東側に向けて開口していた。

この地点は、「ネクロポリス」全体の最高点に位置しており、真東には、今でもブルジュ・ベイティン遺跡を望むことができる。また、高台であるため、南側にはエルサレムが視認可能であった⁷。さらに眼前に移行期青

銅器時代の墓が認められることも含め、この場所が特別な意味を持っていた可能性も考えられる。しかし、横穴墓はワディ・タワヒーン全体に広がっているため、この点は今後慎重に判断したい。

3-1. 墓4 (RT49、図9)

調査区西側の段丘面に隣接する横穴式の墳墓のうち、北側の規模のより大きい墓を選択して調査した。残念ながら、この墓の調査は完全に終了していないが、今年度解明できた点について報告する。

墓の前の平坦地は、上述のように、ブルドーザーで表土をはいだが、墓4とその隣の横穴墓(墓五)の前には、盗掘時の排土と思われるテラ・ロッサの堆積があったので、その部分だけ(ローカス7、8)前もつてけずり、篩を用いて遺物の確認を行った。結果として、多量のローマ時代の土器片と細かい人骨が確認されたが、部位を確認できる大きさの人骨はなかった。

ファサードは大きく切り込まれ、岩屋根付き窪地が手前であり、その奥に改めて矩形の入口が掘り込まれていた。ファサードの高さは約一・七五メートル、横幅三・二メートル、奥行一・六五メートルであった。ファサード

の落ち込み部分にも、その東側の平坦地につながるテラ・ロッサが堆積しており、やはりローマ時代の土器片と破砕された人骨が大量に確認された。

墓自体の入口は、縦長の矩形(高さ八〇センチ、幅四四センチ)に丁寧加工されており、その周囲は一五センチから二〇センチ幅のマージンで平らに掘り込まれていた。

墓の内部は、入り口から約一・一メートル落ちたところに岩盤を掘り抜いた床があった。入り口からそこに下りるには、入り口内側にある横長になった二段ほどの段差を利用することになるが、少なくとも現状では意図的に造られた階段の状態を保っていない。掘り下げられた玄室の床部分は奥行一・七メートル、横幅は、入り口側が一・二メートル、奥が一・〇メートルぐらいのほぼ矩形をしているが、四方の壁を見ると、途中で軸線が正面から若干南向きに変えられたように見える。これは、後述する二段のロクルス(8)と関係しているかもしれない。

一方、玄室自体ははるかに大きく、奥行き約三・二メートル、横幅約三・一メートルのほぼ矩形になっていた。前述の床部分以外は、ほぼ入口と同じ標高で左右と奥に幅約一・〇メートルの棚が岩盤が掘り残されていた。周

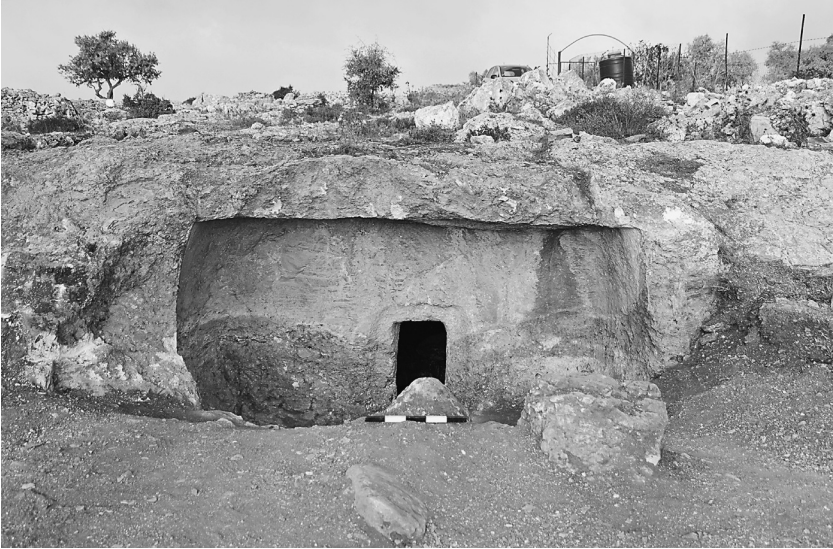


図 9a 墓 4 のファサード（東側から撮影）



図 9b 墓 4 の内部（正面に 2 段のロクルス、右側にロクルスの前の棚が見える）



図10 墓4から出土した鉄器時代のランプ

囲の壁も棚の部分も崩壊してきており、丁寧に整形された跡は確認できないものの、形状としては、この地方の鉄器時代に典型的な「四部屋」式構造となつているようにも見える。実際、覆土の床に近い地点からほぼ完形の鉄器時代のランプが出土しており(図10)、周囲からも鉄器時代の土器片が確認されているので、この墓は元来鉄器時代の墓であつたものが改変されたものかもしれない。

この棚の上の壁には、五基のロクルス(遺体や骨箱を置くための横穴)が放射状に掘りこまれていた。ロクルスは、左(南)側の壁に並列して二本、右(北)側の壁に並列して二本、正面(西)側の壁に、上下に二本設置されていた。この内、北側の一本はまだ未発掘であり、ひよつとすると正面の左側にもう一本あるかもしれないが、この点はまだ調査が終了していないので、確認ができていない。完全に発掘された西側のロクルスと北側手前のロクルスは、すべて幅約六〇センチ、奥行き約二・二メートルで、開口部は馬蹄形(高さ七〇〜九八センチ)をしていた。この内、左手前側のロクルスは、その奥で南隣の横穴墓のロクル

スと連結していたことがわかった。ただし、これが意図的掘削かどうかは不明である。

それぞれのロクルスの内側には、粘性の高いテラ・ロツサ質の土砂が堆積しており、発掘作業は重労働だった。この堆積及び床の堆積からは、やはりローマ時代の土器片と小さな人骨片が相当数確認され、オシユアリ（骨箱）の一部ではないかと推定される整形された石灰岩製の平石片も数点確認された。

中央上段のロクルスの開口部は、他のロクルスと同様、馬蹄形になっていたが、その奥は岩盤の床が掘り下げられ、「石棺」のような形状（二・一メートル×五五センチ）になっていた。側面の壁の床に当たる高さには段差がつけられており、その一番奥には石板状の蓋（五〇センチ×二六センチ、厚さ一二センチ）が残っていた。石棺の中は空であったが、青銅製の鍋のような容器が一点だけ検出された。これは比較的近年のものと思われ、墓使用時のものではないであろう。いずれにしても、このように手の込んだロクルスの造り方は珍しく、一族の有力者の墓だったのかもしれない。

中央下段のロクルスは、他の四つのロクルスより一段低い位置、すなわち玄室の周囲を取り囲む棚の正面の壁

に造られていた。開口部の形状は、他のロクルスのように上部がアーチ状になっておらず、より矩形に近く、一部が崩落によって壊れていた。幅は約四五センチ、奥行きは二・一メートルであったが、軸線は上段のロクルスよりも若干左（南）にずれていた。形状や位置の違いと合わせて考えると、掘られた時期が違う可能性が考えられる。ロクルス内部の堆積はほとんどなく、遺物もあまり認められなかった。

b. 小結

墓4の調査はまだ完結していないが、現状から理解できることをまとめると以下ようになる。

まず、ファサードや入口部分の形状、玄室の周囲の壁にロクルスが放射状に掘りこまれる内部構造は、紀元一世紀頃のエルサレムに多数知られるユダヤ人の墓と非常によく似ている⁽¹⁰⁾。今後、類例との比較や分布研究が必要となるであろう。特に、正面上段のロクルスの造り方は非常に丁寧であり、かなりの有力者の墓だった可能性が考えられる。ロクルスを二段に造ること自体はエルサレムの墓にも類例があるが、正面上段のロクルスは、方向、位置、形状がすべて他のロクルスと異なっており、おそ

らく後の時代になって加えられたものだと思われる。つまり、この墓は、ローマ時代にある程度の期間、継続的に使用されていたと考えられるであろう。

玄室の周囲の三方に遺体が置ける大きさの棚が残されていることは、鉄器時代に特徴的な「四部屋」式の構造を想起させる。実際、鉄器時代の土器が墓の内部や周囲から出土していることは、こうした可能性を示している。しかし、墓自体が崩落によって傷んでおり、また発掘自体も完結していないので、この点はさらに調査することとしたい。

4. まとめ

今年度のワディ・タワヒーンのネクロポリスにおける調査成果をまとめると、以下のようになる。

(1) ワディ・タワヒーン西側段丘の最上段には、移行期青銅器時代の竪坑墓とローマ時代の横穴墓が集中的に造られていた。

(2) 移行期青銅器時代は、これまでテルが都市化されていたかどうかが大いに議論されてきた時期であり、今回このように密集して同時代の墓の存在が示されたことは、その議論に貴重な情報を提供するものである。

(3) 横穴墓は、ローマ帝政期初期のエルサレムに数多く見られるロクルスを用いた形式の墓であり、内部が造り直されるぐらいの期間継続使用されていたと思われる。この墓は、元来鉄器時代に典型的な「四部屋」式構造の墓として造られたものが、ローマ時代に改変された可能性もある。

もし移行期青銅器時代、鉄器時代、ローマ時代と一貫してこの場所に墓が作り続けられていたとするならば、それを作り、使った人々には、何らかの連続する意識があったと考えられるかもしれない。その際、この場所がワディ・タワヒーンの最高地点で、真東にブルジュ・ベイティン、南にエルサレムを望む場所であったことにも、何等かの意味があったかもしれない。ただ、ローマ時代の墓はこの場所以外にも、ワディ・タワヒーン全体に広がっているのので、こうした解釈には注意が必要であろう。このように、本年度の調査は、個々の墓の情報を提供しただけでなく、この地区のネクロポリスに何等かの継続性があったことを感じさせる証拠を示すこととなった。今後は、今年度まだ手をつけることができなかつた部分の調査を完結し、近隣遺跡の類例と比較検討することで、

これらの墓の性格をより正確にひかむべきであろう。

参考文献

- Dever, W. G., "Archaeological Methods and Results: A Review of Two Recent Publications," *Orientalia* 40 (1971), 459-471.
- Finkelstein, I., "The Archaeology of the List of Returnees in Ezra and Nehemiah," *PEQ* 140 (2008), 7-16
- Finkelstein, I. and Singer-Avitz, L., "Reevaluating Bethel," *ZDPV* 125 (2009), 33-48
- Kelso, S. L., *The Excavation of Bethel (1934-1960)*: William F. Albright, Director 1934, James L. Kelso, Director 1954, 1957, 1960 (*Joint Expedition of the Pittsburgh Theological Seminary and the American Schools of Oriental Research in Jerusalem*), (The Annual of the American Schools of Oriental Research 39), Cambridge: The American Schools of Oriental Research, 1968
- Köhenen, K., *Bethel. Geschichte, Kult und Theologie* (OBO 192), Freiburg: Schweiz/Göttingen, 2003
- McCarter, Jr., P. K., "The Patriarchal Age," in H. Shanks ed., *Ancient Israel: From Abraham to the Roman Destruction of the Temple*, revised and expanded, Washington D.C.: Biblical Archaeology Society, 1999
- Taha, H. and Sugimoto, D., "Beitin: An Open Archaeological

Park," *This Week in Palestine*, no. 187 (2013), 52-54
マザール, A. 『聖書の世界の考古学』リトン, 二〇〇三年

年

杉本智俊 「「ベテル」遺跡の現状―二〇一二年度ベイティン

遺跡(パレスチナ自治区)における考古学的一般調査」

『考古学が語る古代オリエンツ』二〇一三年, 一〇二

―一〇七頁

杉本智俊 「ベイティン(ベテル)遺跡における考古学的調

査の課題」『聖書学論集』四六号, 二〇一四年出版予定

杉本智俊・間倉裕生 「二〇一二年度ベイティン遺跡(パレ

スチナ自治区)における考古学的一般調査」『史学』八二

―一・二号, 二〇一一年, 一〇五―一二七頁

註

(1) 本報告は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究
(A) 課題番号 24251015 (研究代表者: 杉本智俊) によ
る成果の一部である。

(2) テル・ベイティンは、今から五〇年以上前にオルブラ
イトとケルゾーによって発掘調査されたことがあるが
(Kelso 1968 参照)、『ブルジュ・ベイティン』もこのワデ
イ・タワヒーンも「これまで本格的に調査されたことはな
い。

(3) この他、未確認ながら確実視される墓が二〜三基、円
形の窪地が一〇か所以上あったが、これらは、上述の通
り、記録に載せていないので、この結果は網羅的でない
ことに留意されたい。

- (4) 地域住民の一人の男性が、一九九〇年にガザから移住した後、近辺の盗掘を試みたこと、また、付近に未発掘の墓があることを証言したが、この点は確認できなかった。
- (5) ケルゾーもディーバーも、当時の呼称に基づいて「移行期青銅器時代」のことを「中期青銅器時代Ⅰ期」と呼んでいる。しかし、現在は中期青銅器時代Ⅰ期を移行期青銅器時代、ⅡA期を中期青銅器時代Ⅰ期、ⅡB期をⅡ期、ⅡC期をⅢ期と呼ぶことが多く、本論もそれに従っている。
- (6) 逆にディーバーは、「聖書考古学」を批判する思いが強すぎたのかもしれない。族長物語に何等かの歴史的核を認める研究者は、現在ではむしろ中期青銅器時代Ⅱ期(ⅡB期)に年代づける傾向がある(たとえば、MacCarter 1999: 8-9; マザール 2003: 146)。ので、ケルゾーの主張自体無意味なものとなっている。しかし、特定の型式の土器の多少だけに基づいて、それぞれの時代の居住の大きさを量ろうとする研究(例えば、Dever 1968; Finkelstein et al. 2009)は、方法的に危ういものを持っていると言わざるを得ないであろう(杉本、二〇一四出版予定参照)。
- (7) 裏側(西側)からは、現在のラマツラーの町も見える。
- (8) 複数形はロクライだが、ここではすべて単数形で記す。ヘブル語では、コック(単数形)、コヒム(複数形)と呼ぶ³⁴。
- (9) ただし、エルサレム周辺で知られるローマ時代のロクスを伴う墓にも、同様の棚を持つ例はあるように思われる。この点は、要検討である。
- (10) スコプス山西斜面、レハヴィア、サンヘドリン、アケルダムの墓などを参照(A. Kloner and B. Zissu, "Jerusalem: The Necropolis of the Second Temple Period," E. Stern, ed. *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land*, vol. 5 Supplementary volume, [Jerusalem: 2008], 1822-1824 所収が全体像を概観している)。
- (11) たとえば、サンヘドリンの墓でもロクルスが二段に並んだ大きな墓室が知られているが、ここでは中央のものだけでなく、全体が二段になっている。